

対談

守 破 創

米国系の銀行や証券会社を経て作家に転身した幸田真音氏。国際金融市場の現場での経験を生かし、それまで小説の題材としては敬遠されてきた「金融」や「経済」に挑み、わかりやすく、楽しんで読める作品を世に送り出してきた。作家になったいきさつや思い、そして小説を通して発し続けるメッセージとは。幸田作品の熱心な読者でもある雨宮正佳副総裁と語り合った。



日本銀行副総裁

雨宮正佳

Masayoshi Amamiya

1955年東京都生まれ。79年東京大学経済学部卒業後、日本銀行入行。98年企画室企画第2課長、同年金融市場局金融市場課長、99年企画室企画第1課長、2001年同参事役、02年考査局参事役、04年政策委員会室審議役（組織運営調整）、06年企画局長、10年日本銀行理事（12年～13年大阪支店長嘱託）、14年日本銀行理事再任、18年3月日本銀行副総裁就任。



作家

幸田真音

Main Kohda

1951年滋賀県生まれ。米国系の銀行や証券会社でディーラー、外国債券セールス等を経て、95年『小説ヘッジファンド』（講談社）で作家に転身。2000年に発表した『日本国債』（講談社）がベストセラーとなり海外メディアからも注目を浴びる。14年『天佑なり 高橋是清・百年前の日本国債』（角川書店）で新田次郎文学賞受賞。最近著は『人工知能』（PHP）。政府税制調査会、財務省・財政制度等審議会、NHK経営委員会等の委員を歴任。大手企業の社外取締役も務める。

「人の営み」を映し出す 経済から小説は生まれる

国際金融市場の現場から
作家デビューまでの道のり

雨宮 幸田さんは作家になる前、最初は外資系の銀行に勤めていたと伺っています。

幸田 米国系の銀行に就職し、大阪で働いていました。私が就職活動をしていた一九七〇年代中頃、学生課に届く求人には、女子にのみ「自宅通勤限定」という条件がついていました。女子社員の一人暮らしは認めないというのです。私は英語を使う仕事でした。私には英語が、自宅から通える企業が見つからない。唯一、その制約がなかったのが外銀でした。

外銀に入社してからは、まず預金や当座貸越業務を担当、輸出入の資金決済や船荷証券買取りなど貿易業務も学びました。世界ではお金やモノがこうやって巡り、経済が回っているんだなと実感でき、毎日が本当におもしろかったですね。

結婚退職して上京しましたが、半年後に復帰した先も米国系の銀行でした。ディールングループで働くアメリカ人ボス二人のアシスタントとして採用され、当初はいわば雑用係でした。為替取引や金融市場の最前

線ですから、怒鳴り声が飛び交い、電話は鳴りっぱなし。なにせ好奇心旺盛なものですから、かかってくる電話を片っ端から取っては、英語に訳して、ボスに伝えていました。ただし素早く、しかも正確でないといけません。大変でしたが、夢中で仕事をしました。やがて、日本国債の市場に関わるようになりました。数十億円、数百億円という巨額の取引を一瞬で決めるので、数字の言い間違いは許されぬ。市場の仕組み、専門用語も必死で勉強しました。そうしているうちに、徐々に周りから信頼を得て、任せてもらえる仕事も増えていきました。

そんな仕事振りを評価したボスに、「アシスタントではもったいない」と言われ、いきなり専門職のディーラーに昇格したんです。すごいサクセスストーリーだと、当時ニューヨーク本社でも騒がれました。アメリカ映画の『ワーキング・ガール』みたいだって。

その後、新設された証券子会社に移籍し、外国債券のセールスをする事になりました。未経験の業務への戸惑いもありましたが、ボスに「ディーラーより格段に取引量の多い顧客を相手にするのでやりがいい

ある。君はもつと輝かないといけない」と心憎いことを言われて（笑）。実際、最大手の機関投資家ばかりを担当するゲリラ営業部長（？）みたいでしたね。

雨宮 まさにサクセスストーリーですね。今までのお話を伺って、私の中で腑に落ちました。と言いますのも、金融市場というのは非常に専門的で、理解するのが大変なのに、どうして幸田さんはそんな金融の世界を、一般の読者にわかりやすく描けるのかと思っていたんです。取引現場の実体験があったということなんですね。

幸田 その後、社債の発行市場から企業の資金調達（コーポレートファイナンス）まで、色々と経験しましたからね。最初から金融に興味があったわけではなく、知らずに足を踏み入れた世界、予想外の出会いでした。でも学ばば学ばほど金融はおもしろい。加えて、外銀にいるからこそ味わえる驚きや疑問もありました。例えば、日本の金融機関の方と外国人の同僚の発想の違いです。何のために働くかという話題一つ取っても、同僚は当然株主のためと断言します。収益に貢献して株価を上げ、株主を喜ばせて報酬をもらうの

だと。一方で邦銀の方に同じことを聞くと「会社」のためだと。

雨宮 そうした違いは興味深いですね。外銀でのキャリアを着実に積み重ねていた幸田さんが、作家になろうと思われたきっかけは何だったのでしょうか。

幸田 日本の機関投資家相手の外国債券セールスが、ようやく軌道に乗ってきた頃、「ブラックマンデー」^{〔注〕}が起きました。これを機に、担当する顧客の取引量も大きく落ち込み、これまでのような成果を出せなくなりました。高額の報酬をもらっているのに部門の収益が上げられない。これが強いストレスになり、十二指腸潰瘍で入院を繰り返す羽目に。結局ドクターストップがかかり、三八歳で一大決心をして、会社を辞めたんです。

その後、すぐに体調が回復したので、今度は自分で会社を設立し、まともな休みなく働きました。その無理がたたったのでしょうか、五年ほど過ぎた頃、今度は腫瘍が見つかったんです。

雨宮 手術が終わり目を覚ました幸田さんに、ご主人が、「ドル・円レートの一〇〇円を割ったぞー」と声をかけてくれた、という話を伺ったこ

とがあります。強烈な気つけ薬のもりだったんでしょうね。

幸田 実際、よく効きました（笑）。ただ、死を意識したその時、「自分の体は借り物だ」と思ったんです。お借りしていたものを何と粗末に扱ってきたのかと。そして、この世に何も残さず死にたくはないとも。外銀であれだけおもしろい経験をさせてもらったので、せめてそのおもしろさを生きているうちに伝えておかなければ、と焦りを覚えました。そんな思いから、当時の自分と同じ四三歳の女性主人公がヘッジファンドをつくって日本を円高から救うという物語を、誰かが乗り移ったかのように一気に書き上げました。それが『小説ヘッジファンド』というデビュー作になったんです。

小説から発せられる 危機管理のメッセージ

雨宮 幸田さんの作品を拝読しますと、いつも二つのメッセージを感じます。一つは、デビュー作で為替市場の大きな変動に警鐘を鳴らされたように、想定外の事態や危機にしっかり備えよ、ということ。もう一つは、経済はまさに人間の営みだということ。日々の暮らしや人生、

〔注〕ブラックマンデー／1987年10月19日の月曜日にニューヨーク証券取引所で株価が急落し、これを契機に世界的に株価が暴落した。

喜びや悲しみまで映し出す。それが経済だというメッセージが強く伝わってきます。

幸田 そのように言っていたら、感激です。デビュー当時は、「経済のことさえ書かなければ、作品を読んであげる」と文壇の大御所からも、編集者からも言われたものです。やたら数字が出てくる小説なんて文学じゃないと。純文学などと比べて、経済やお金の話を下に見ているような、そんな雰囲気がありました。

でも、純文学や恋愛小説を書く人はたくさんいらっしゃるでしょ。私を書きたいのは経済だと。経済がどうしても正しいのは、両極端の理論が両方とも正しい、両立することがあり得る、というところなんです。例えば円高にしても、良い面、悪い面の両面があります。経済には、回り回って元に戻ることや、どちらも否定しない、どちらも正解、ということがありますね。

雨宮 そこが自然科学とは違う、やはり人間の営みだと言える部分でしょうね。

幸田 ですから経済は知れば知るほどおもしろい、ということを読者に伝えたい。一方で、知らないと落と

し穴にはまるという危なっかしさもありますよね。知っていれば備えられ、避けられる。そういうことも伝えたい。私は国際金融市場の現場で働いてきたので、つい先を読もうとする習性がある。次に何が起こるか、ものすごく興味があるんです。

雨宮 二〇〇四年に上梓された『日銀券』では金融緩和策の転換について、現実より二年早く小説にされました。また一七年に発刊された『大暴落カラ』は自然災害が一つのテーマでしたが、まさしく一八年は「災」の年になった。常に世の中を先取りして書いておられるように思えますが、小説の題材はどうやって選ぶのですか。

幸田 私はよく「好奇心が洋服を着ている」と言われるんです。やけどをするから触るなど言われると、つい触ってみたくなくなったりして(笑)。小説を書くときも好奇心のままに、膨大な資料や取材から得たインスピレーションをもとに、想像力を無限に膨らませるんです。

ただ、これまで順調に小説を書いてきたわけではありません。現実には打ちのめされ、小説が書けなくなつた経験もしました。「9・11」が起

きた時です。あの日、私は都内のホテルで缶詰になり、サイバーテロを題材にした長編小説を書いていたんです。その時、昔の仕事仲間からメールが来ました。テレビをつけたら世界貿易センタービルに飛行機が突っ込んだ……。あのビルの斜め前には、以前勤務していた銀行の本社ビルがあります。こんなリアルなものを見せられて、私はフィクションでテロを書く意味がどこにあるんだと暗澹たる思いに陥りました。もう書けない、作家を辞めようかと。

雨宮 そんな大変な状況で、何が幸田さんを再び小説に向かわせたのでしょうか。

幸田 執筆を再開させてくれたのは、読者から届くメールでした。そこには、「自分は為替トレーディングの仕事で完全に行き詰まっていたが、幸田さんの小説で元気をもらった」とか、たくさん励ましの言葉がありました。そんな読者からの感想を読んでいるうちに、そういう方が一人でもいてくださるのなら、私が小説を書く意味はあるのかなと。そう思えたとき、「9・11」と真正面から向き合う小説を書こうと決めた。『コイン・トス』と題する短編

を一晚で書き上げたんです。「答え」のない世界で読者に思考してもらおう

雨宮 今年二月には『人工知能』と題する新著も出されました。私は昔からSF小説が好きで、若い頃からアイザック・アシモフなどを読んできました。ぜひ幸田さんに、経済SF小説を書いていただきたいと思っています。というのも、近年の変化は本当に速くて、例えば一〇年前はスマートフォンが登場したばかり、SNSの利用もほとんどなかったわけです。それらが今ではこれだけ普及している。この先はもっと速くて大きな変化があるのかもしれない。そうした変化を予測しようとする場合、科学的に詰めながら議論する方法があれば、SF小説のようにフィクションの世界のなかで思考実験していく方法もあると思うんです。

幸田 小説は、まさに読者に疑似体験をしてもらうものですからね。何が起きるか、落とし穴はどこにあるか、登場人物に感情移入しながら考えることもできます。

雨宮 われわれも昔、経済学のテキストだけではなく、城山三郎さんの



『小説 日本銀行』や『男子の本懐』、山崎豊子とよこさんの『華麗なる一族』などを読んで、経済や社会の仕組みを疑似体験し、自分ならどうするかを考えました。今の若い世代にとって、幸田さんの本がそういう役割を担っているのかもしれないね。

幸田 そう言っていたくのは大変光栄です。ただ最近心配なのは、インターネットやSNSが普及した影響でしようか、長編をしつくり読んだり、行間を深く読み込んだりすることなく安易に答えを求める風潮が強まっていることです。情報があふれ、キーボードを叩けば答えらしきものが出てくる今の世の中。自分の気に入ったものだけを、何の疑問も持たずに受け入れる。違う意見が出てくると、それを頭から否定したり、ダメだと決めつける。「深く考える」

というプロセスが抜け落ちてしまった気がしてなりません。

若い編集者のなかには「幸田さん、答えを書いてください」と言う人もいます。小説というのは、読者自身がその世界のなかに入り、主人公はなぜこんなことを言うのか、この人物はどうしてあんな行動をとるのかを、考えてもらうものです。私が生んだ登場人物が読者によって別の命を与えられる、私は、それこそがおもしろいと思って小説を書いているのですが、安直に「答え」を求められてしまうんです。

雨宮 小説は、ある種の「実験室」のなかにいろいろな人物が集まり、動きながら進んでいくものですね。「答え」は、登場人物にも、場合によっては書いている作家自身にもわからないかもしれない。

幸田 おっしゃる通りで、書いている私自身にも「答え」がわからないことだらけです。でもそれこそが小説の奥深い魅力ですよ。最近、そういう小説のおもしろさがないがしろにされているように感じます。私にはあえて、「答え」は読者が出すものですよと言っています。

雨宮 幸田さんは、経済小説を書か

れるわけですが、どんな読者を想定していらっしゃるんですか。

幸田 私自身、特定の読者層を想定してものを書くことはしていません。『日本国債』のサイン会を開いた時は、小学五年生の少年から八〇歳のご婦人まで幅広い年齢層の方が来ていただきました。経済のおもしろさを一人でも多くの読者に知ってほしいですし、その方の人生に少しでも役立てればこんなうれしいことはありません。経済を知られば、いろいろなリスクコントロールの仕方もわかってきます。生きていくうえでリスクとどう向き合うか、これを伝えるのは私の永遠のテーマだと思っています。

雨宮 経済や金融の専門的な分野を扱われる場合など、難しいことをわかりやすく伝えるご苦労があるかと思えます。われわれも金融政策をいかにわかりやすく世の中に伝えていくか、試行錯誤しています。

幸田 私は、金融や経済を軸足にさまざまな分野や時代を題材に書いています。もちろん、その分野のプロの方も作品を読んでくださいます。フィクションとはいえ、そうした方々が読んで「こんなことはあり

得ないよ」などと言われることのないよう、その分野の第一人者に取材したうえで書くようにしています。

そういった方々は、現場で実際に何が問題となっているのか、切実に実感しておられますし、それを正しく世の中に伝えてほしいと言われます。私は、そうした思いを大切に作品に込め、細部までおろそかにせず、書くようにしています。

一方で、正確さを追求しすぎて内容が専門的になりすぎると、読者はついてこられなくなります。そこをいかにおもしろくするかが腕の見せどころです（笑）。その点、小説は人の営みとしての経済や金融を描くことができますから、敷居の高い専門的な内容をわかりやすく伝えるのに適した手段だと思っています。だからこそ私は小説にこだわって書いているのです。

人にわかってもらうというのは、とても難しいですよ。だから私は、二四年も作家が続けているんだと思います。簡単だったらとっくに辞めているでしょうね。これからも日々、チャレンジです。

雨宮 本日は貴重なお話をありがとうございました。